

言葉のヤングケアラー

榛東村立榛東中学校 三年

アジズ ハディア

病気の家族を看病している子、幼い兄弟の世話をしている子、日本語が苦手な家族に代わって通訳をしている子、みなさんの周りにこのような子供はいいますか？

彼らは「ヤングケアラー」と呼ばれています。そしてその中には、「言葉のヤングケアラー」と呼ばれる子供たちがいます。これは、日本語が話せない・読み書きができない家族のために、言葉を支援する子供のことです。今日本ではそうした子供たちが増えています。そして、私もこの「言葉のヤングケアラー」の一人なのです。

私は日本で生まれ、日本で育ちました。皆さんと同じように日本の幼稚園、小学校に行き、そして中学校に入学しました。しかし、私の両親は外国出身

で、日本語が分かりません。私の家庭では両親とはワールドウー語という言葉で話し、兄弟とは日本語で話しています。両親は日本語ができないため、病院や買い物で通訳として一緒に行くことが多くあります。病院での通訳はとても大変です。専門的な言葉や難しい単語がたくさんあるため、調べながら通訳する必要があります。また、学校生活のことでも先生とコミュニケーションをとることができません。学校での面談では、両親の代わりに日本語ができる兄が来ます。学校からの通知が来ても両親はわからないため、どのような内容なのかを説明する必要があります。

私は春休みに外国にルーツを持つ子どもたちがみんなで作るプロジェクトにボランティアで参加しました。このプロジェクトは、日本語を学びながら一冊の絵本を完成させるもので、日本に来たばかりの子供たちもたくさんいました。彼らは日本語が分からず日本の学校に通っています。日本人の同級生に一日でも早く追いつこうと、一生懸命日本語を勉強しています。しかし、言葉が通じないことがもたらす孤独や困難を感じているのです。言葉が分からないことは本

当に辛いです。皆さんも考えてみてください。周りの人がこつちを見て笑いながら何かを話しています。言葉を理解できないとそれが笑顔なのか、冷やかしのなか全く分かりません。文字はすべて凶形のように見え、情報は目で見てしか得ることができません。気持ちを伝えることができないことはとっても辛いことです。しかし、言葉が分かってくれば、今度は通訳として家族を支えなければなりません。

ボランティアで参加した時、私は普段家族の通訳をしている他の子供たちと会いました。その中にはすごく辛い思いをしている子供もいました。その子の家族が亡くなってしまった時に、病院から家族が亡くなったことを先生から通訳するように言われて、それを周りに伝える必要があったと聞いて、すごく辛い思いをしている子どもたちが他にもたくさんいると感じました。しかしこのような子供たちの存在を知っている人は多くありません。総務省の調査によると2005年には五人に一人が外国にルーツを、持つ子供になると言われており、その数は今後増加していくと予想されています。

私は自分自身が言葉のヤングケアラーとして両親の通訳を通してできた経験をシェアすることで、同じような状況にいる子供たちに勇気を与えることができると考えています。自分は一人ではない、他にも同じ状況の人がいると、皆さんも目を向けてください。日々辛い思いをしながら、一生懸命に家族を支えているヤングケアラーの子供たちがたくさん存在しています。私たち一人一人がまず知って、そして周りに居るかもしれないこのような子供たちに寄り添う必要があります。例えば、優しい言葉をかけることで、少しでも気持ちが楽になります。「最近どうしてるの?」「何か大変なことあった?」「このような言葉でも、彼らの心を少しでも軽くすることができるとです。あなたの周りにもヤングケアラーとなり、苦しんでいる子供がいるかもしれません。彼らは自分達の成長や学びを犠牲にしている可能性があります。私たちが小さな一歩を踏み出すことで、その一歩が大きな変化を生むはずです。子供が子供らしい生活を送れるように。